



安政見聞錄

上

Edward S. Morse
Collection

DS
835
.H388
1856

v. 1



服保德編輯

安政見聞錄

武江

服部氏藏版

叙

和漢古今の傳記と稱するもの中に汗一棟

をえは志のまじりも世界の廣き十一年實の多

端のすまひ及び繁き一獻ひて簡易ふを尤

漢文の書よおける文字を減してそめりの通

ぶあはと因しゆり。は著り但律先生が存標あ

古實盛の傳を門人等不綴して文字少た

を甲しるはより成人の記ふもしくもを綴る如何

和漢古今

長那

45208
1/80

いふに同好の書作者の功をいふに延び

いふに同好の書作者の功をいふに延び

今この見聞録も文章の整いたるを

借録手紙を新しく善悪社公の善別を

見聞のまじく掲げ出し人毎に掛るを

壽らふ遠くおんおんおんおんおんおん

喜怒哀楽の関りありておんおんおん

常を失ふありて平に思ひを深く心中

可^え感^ご悟^ごを^ご推^ご進^ごす。少^まく^ま多^まく^ま念^まの^ま時^まに^ま條^まみ^ま恩^ま
を^ま忘^まれ^まど^ま美^ま我^まを^ま闕^まぎ^まぬ^まの^ま物^ま語^まを^ま具^まへ^ま奉^ま
て。善^ま美^まの^ま推^ま進^まを^ま勵^ます^まの^ま一^ま端^まと^ます

たみくちあ

于^ま侍^ま安^ま政^ま丙^ま辰^ま庚^ま申^ま夏^ま

晁^ま詠^ま漁^ま父^ま蹟^ま



安政見聞録春中總目標

卷之上

地震の辨

孝婦非命に死するの條

孝女死期不紀念を遺すの條

昇穢の老変天變を知らるの條

士人自身飢民を救ふの條

卷之中

父母に先づりて遁去還て災ふの條

地震によりて江尾の肉を脱するの條

流言を信じて禍ひを招くの條

地震おんの前ぜん後ご地脈ちま狂きやうふ條

地震おんの方角まうかくを以もつて條

卷之下

節婦せふ衣ぎを捐なて夫おつとの死骸しがいを捨すて條

父母ふぼを護まもつて仇さかを忘わする男おとこの條

瞽者こや未ま然ぜんを知しるの條

地下ちかより火ひ氣きを祭まつするの條

神明かみ為なる民たみを憐あはれはるの條

嵐土あらし中なかより多おほく生なまる條

蝦蟇がま巨蛇こびと聞きふ條

通計十七條總目的畢

天文月記

三

壬辰四月廿
より深川富岡の
境内より下総の
成田山不動明王の
開帳ありの賑ひ
古今に稀なり



廿日晴夏



元例

○此書ハ元素我子孫^{ニテ}忠孝義^ヲ勵^スま^シん^ガ為^ル小^近曾^日見^受たる^所と^テ舉^ゲて^敢て^信偽^区同^トス^ル。む^ニ定^ムル^ハ條^小五^リ七^ハ任^所姓^名の^明り^{なる}も^こし^は成^若き^は依^りの^り遺^憾あ^らじ^く結^を子^{ども}。爰^時現^在此^人の上^に少^ク憚^りて^あら^じ少^あら^じま^らば^{。ナ}某^の所^のを^と某^との^に記^しる^{。這}ハ^る人^の用^わび^{。其}の^行状^と志^と成^速く^少年^を論^まて^なま^らば^{。ま}く^画と^多く^加へ^{。幼}童^の帝^に屯^て閣^と成^甚き^ら為^のこ^{。法}君^の賢^階不^備あ^らじ^{。卷}中^小ま^ぬる^{。文}政^天保^度の^凶災^成出^るハ^{。安}政^見聞^の言^不差^{。ふ}し^のど^も因^ふと^直に^録出^し。近^世の^こと^を知^し。め^んと^その^好い^と古^き世^のゆ^きと^載る^も。こ^の家^と直^に同^意あり

作者再識

安政見聞録卷之上

○地震の辨

そと地ハ四圍に竅ありて相通ど。蟻の巢の如く。まご菌の

辨の如しとある。初て火の氣その中に伏し。火氣歸るとするに。

水氣に推して歸ると能をよ。人の轉筋の如し。この時不玉。火氣

ハ陽よして割き。ある氣の陰と突破して奔。周て大地震動する不

玉るとそとの理天よある時ハ雷霆よ奔し。北をりて北極の地

如きハ火よ寒よて熱を生ると能をよ。まご赤道の下ハ太陽の為

小勝よて教ト易くある由息よ因て各震ふと少なり。温暖石多

き地ハ下に空穴ありて熱氣吹入。冷氣の為小勢。欽極まるとするに

火よ震ふ。その甚しきよ玉りて。地裂け。山崩。江河遂に流るの類

災害極まりたるに及ぶ。凡そ天災間災變のむの地震不勝る
 のなり。和漢古昔よりこの患へ史不ええる所奉て数へざり。然
 ども史中へ大北震人民牛馬多く死さるとの載て其精
 きをいふまじ。今まを察するにやま。近來越後之條の地震
 及び文政の度東陣の地震。天保の度信長之地震。其年を去
 ると甚遠うづ比といへども。その傳はまる知匿くして。その精しきと
 知しざり。嘉永の度東海道の地震。至て近きところあざり。をまこと
 繕る人ふよりて大に差つるとあまじ。傳は極めて定らるるべし。人
 馬の壓死或は火を燒の本鏡を破て。その變異の度大なるを察する
 のこと。然るふ大に都ハ地震甚稀し。折管小動ありといへども。屋
 瓦を墮とふいざり。俗よりい都ハ掘抜の井と稱する多し。故に地

寛平に救ふ。をめて大震あるとき。と人火不安請せり。然るも
 年安政二丁卯。十月二日の夜。雲の刻。過るに暴ふ火。地を動して。殿
 舎と破り。民屋懷と倒る。このふあうぞ。八方より火燃出て。暗夜の宛
 然白晝の如く。二十餘箇所の失火。罵烟天と急し。民家の男女。梁ふ
 歩は。或は棟垂木に壓は。あるは土床の壞るふ。あうして。死するりの
 救と。しむ。適命全きも。物不獲ま。れて出ると。得む。親族との傍ふ
 ありて。杖んとす。と力と。び火爛頭。更ふ近づく。不及び。ことを救ふ
 不遑も。看為と。活あう。猛火不燼。と忽ふ。灰燼と。あると。憐む。べきの
 事。しきあり。あふふ。ら。凶變に遭て。或は。壓は。死し。或は。燼と。死し。或は
 手。足と。折り。て。廢人。と。ある。りの。奉て。算へ。が。う。と。是。各。悪人。ふ。あ。う。ぞ。と
 とも。時。の。難。ふ。罹。り。て。冰。命。に。終。る。救。て。善。惡。の。差。別。を。同。志。と。の。時。ふ

妻あかつて善者せんやとしりども免めんはりて幸さいぞ難がたし。時ときの幸さい不幸ふさいのこゝろひの
 うけざる妻あか災さいに遭あひ強さう擣げう必かならず懼おその時ときふあいて幸さいく至いた孝かうあるひ忠ちゆう節せつ。
 その心こころがけよき人の自まづら功こうを顕あらるあり。今いま傳でん傳でんせざる如ごとの二ふたことを
 奉まうて後こう生せいと励むまると然しかどもその伯ちゆう所しよ姓名せいめいの詳しょうあるも憚おそあきふ
 あらねが紀きさん

○孝婦かうふ跡あと今いまに死しきの條じょう

于こゝ武ぶ及及び千せん位い者しやと六む日光にっこう道どう中ちゆうの出でにゆて大小たうせうの旅りよ店てん軒けんとありて。
 妻あかとひども警あや華かあり。夫あま何なに某ごととしりる商あき賈がの婦ふ。その年とし二十
 一ひとあり。子こに姑あかふよく仕つかへて孝かう行こうとつく。ける。然しかるにその夜よの
 妻あか夫あまふあひ家うち内ないの男おとこ女めづ十五ご六む人にん破やぶ警あや枕まくら震ふるよとしひ由よし果はび対たい面めんを
 作つくて逃にげ出でるかの嫁よめハ子こ舎やに在あり。計けい線せんとありける。夫あま小こ孩ごを計けいと捨す

矢庭小戸を蹴ひりきりて庭の方へ立出る小瓦の落るに困小木の葉の
敷小異るる比蔀格子由えるからちに忽枕權け倒まてり。と六什
磨いりる孫来ぞと眼も瞑と胸奥き渾身戦慄と震ひつを如
に倒まて在けるが。倍と心づきては息をえすの。姑のふえざるハ老
人の足弱くて出ろ子のひーりのるん。と聲を限り小と息を呼ば葉の
如く姑の強きて逃出んと身は起せらうど歩ゆがう。殊小燈火ハ頼
小消え心周章て途方にまよと呻吟らちに意強く障子外は鴨居
ぬけて初先小様らり。進退の度を失ひて更小生らる心枕ゆるる小。
孫の聲して再さるハ何方小在いと救四呼ぶ夢のゆゆる小姑ハ力せぬ
て。意此知ぞと回答あがう。そまを郷導小出んとて孫ハ姑の夢を破
まご孫の内小在せらう頼此方へ出いと叫びあがう。孫入つて夫庭に姑

孝婦姑を
 救ふとて
 還て非命
 終ふ



上
 下

1100 1100 1100



世力時感
斎市

1100 1100 1100

を背に負ひ。さあ出んとしるを。憐むべし。その傍の柱撞けて二階の
梁そのうへ小落かつて二人猪共小お倒さす。起あぐんとするも甲斐なき。
壓にうして是時死せり。妻下塔の用の奉あり。他所ふゆきて在り
けるが枕邊に寝き止むと候て。むしをうへ小馳帰す。家内の老の心絆
あり。その傍を索ぬるに。巨住ひの男女為の夫とて外面小ありぬまじと母と
妻のあしきる小寝きつるまじ。その家居の崩し傾き。柱根落て内へ入るべ
きやうゆり。然こそ二人この裡に呻吟あつるのなやめ。と聲をあげく
名をゆべと。更小對へもあしきまじ。いよ心中心あらず。逃出する下奴を呼び
よを力を竭して覆ひさる。柱根を穿ち倒さる。柱棟を漸く小取除て
とまをえんに。妻の背に母を負ひ。そのまき不知小俯して。二人とゆりち
遍めし。七竅より血滴つ。月もあてし。まぬ景弊に。悲歎ふまじけら。

初はつてあるべきに未まらざるに、頼たのむて棺ひつぎを懸のへ香か華け院いんへ送おくりしと云いふ

解ひらきていそぐ婦ふ人の志こころ丈夫しやうぶ不ふ由ゆ於お信ままり始はつめ獲ときて前後ぜんごを願ねがふ

身を以もつて逃にげしむる幸さい人の情なさけといふべし然しかるに姑はつの身みを乞こふ

不ふ獲ときて、震おそ動どを懼おそまは破やぶ壞くわいしむる家いへに誼ぎ入いりて身を負おひしを

災さい害がいと避さげんとせし不幸ふこうにして非ひ命めいに死し後ごに身を解ひらきしむる

始はつめ逃にげるとき諸しよ共どもに体ていひしむるとの難がたいありざるべきにその時とき

身を忘わすれしむる至いた孝こうといひしむる。是これその理ことわりに然しかる事ことあり。爰こゝに

條じょうにて初はつめざるに賢けん人じん君きみ子の身みを乞こふと云いふ。男子なんしといふとも若わかく

の心こころを一心いっしん不ふ動どうありし。況いはや女子にょしに於おいて。この婦ふ人の身みを乞こふ至いた孝こうと。

稱たすとも逆さからざる。之これを怪あやしむ初はつめざるに。是これその志こころにありしむる。僅わずか二三

歩あの間に。死しを免まぬらんと欲ほむざるに。實じつに天命てんめいといふものなりし

○孝女死期小紀念を託す條

夫小妻まきをこめり深川富川町のきととや。柏屋の何某ある者。以
 前ハ有徳小善志が薄命のらち續き。今ハ次才に困窮志して百仕
 小由暇をとせ。と支辨き對ひて。いと淋しく送りけるが十月首
 八日きり。母の年忌にあたるふより心むりの佛子をいとと親き
 人小由供養せん。と日二月ハ違夜とて朝まど死より野菜を畑へ来
 ると炊くをりから。僅一二町を隔てし所に大工何某あるもの
 嫁二十をりになりけるが。日來親しく性ふふより。今日の佛子の
 傳ひせん。とこの事に来る。いと甲斐なく働きて。支辨が子を
 助けける。かくて夜戌時以このゆ由大工果て。娘ハ帰らんとひける。せ。
 柏屋史辨ハあまを止め。たや亥刻小由程近うえん小今看ハ泊りて

翼の朝あさとく帰かへらまよとひるどふ。その志こころ不任まじして還かへりつ。程ほどとりちる
せし洞ほら度どあど推おしかづけて亥よる刻とき由よしちぬ。たむ憇やすんと床とこあど敷たくん
とくくろその折あつろ。暴あつに虚こ空う動どう揺ゆす。その家いへおに覆おほらんとひ。こ
人の大おほに孩こきて表おもての戸かどを引ひ開あて。矢や庭にわに走はりぬける。柏かしわ屋やの擔かた倒たふ
きて大おほ道みちへ横よこらる。今いま少すこし遅おそろふらの擔かたにおもはる。身を傷やんを
危あやふろろいと吐と息いき吻くて跪ひと居ある。かの娘むすめいままをみて。父母ちちの身みの
う心こころ絆ひり。暇ひままういとひの敷ふべ一ひと敷ふ不ふ近ちか出で。史し婦ふの呼よび止とめ
をあり。今いま緒いと共ともに行ゆて妨たがん。霎あや時ときおねといひけまど。少すこえやま
少すこえずや。回わ答こたもせまして走はり。柏かしわ屋やの妻つまに向むかひ目め来きろろ
て孝かう心しんの世よ不ふ勝かまはる。のたまはる。心こころ裡ら然しかもあるべし。程ほど近ちかけまど
夜よ更さらろ一人ひとりや。帰かへされど。我われの跡あとより逸あそり。被おほ家やへ送おくり還かへん

平家物語

卷之三

小。おん身みのあつ小お在あつて家いを獲まま。とのひ捨すて近ち出しーが。此こ知ち等らの
 殊と更き地ぢ震ぢん割ぎく。且ま家い能えさ之の齋い高たかうれば。大おほう倒たふまさざる家い由よしあうら比ひ。
 死しるに家い並なみ六む六む割ぎ。思おもさける所ところ小お女めの夢ゆめして嗟あはれる昔むかし一ひと助たすてよよと呼よぶ
 夢ゆめをほのきけけが。かの娘むすめによく似おたり。柏かしわ屋やのいふいううて。をし知ちうう此こ知ちうう
 ととぬるに。傍かたの橋はしの崩くづまり下くだり。身みをまままれてお紀おきもああらら比ひ頻しきりに
 叫こゑぶらその娘むすめあり。柏かしわ屋やのより大おほ小こ孩ごきき。比ひままががここをを我われとと俱ともにに性せい
 むむババかかるる道みちああららトトをを怪あやままししぬぬととててげげりり。とのひああらら橋はしの倒たふまま
 一ひと軒けん小こ子こををううけけてて引ひ起おこささんんととななりりけけままどど。生あま指さにに初はじ大おほききううてて一ひと
 の力ちからに初はじゆゆややららむむ。その色いろふふもも老おほ若わか男おとこ女め。右みぎ性せい左ひだり性せいにに群むらががれれどど。
 親おやのち子こをを見み失しひひ妻つまのち夫おとこをを索もとめめるる呻う吟げんああららむむ誰たれああららむむててここをを
 杖つゑんんととすするるののああららむむ。兎う角かくをを方ま向まにに二ふた三さん軒けんああららむむととよりより火ひ燃もええ出でて

忽比程火熾になり。煽八方に飛びあつるやどに。破勢火よりよと銘くに。

崩まゝ家を掃除て。資材雜具を吐きえとま。この時歴にあまをたがう。

まご死やうび程火の為小燻まんとま。この時歴にあまをたがう。

けをよと人を呼ぶ。實に焦熱の苦。この時歴にあまをたがう。

屋の尾等の夢に胸さへ得くと。真き狂ひ心を急て。この時歴にあまをたがう。

ど力及むを。當下柏屋の妻の煽小娘さ。史を索結て。この時歴にあまをたがう。

かよくそ来ぬ。是力を副て。この時歴にあまをたがう。

あて。彼方へ廻り。緒多をうけ。力を究めて。この時歴にあまをたがう。

いざざん。空り。これ。この時歴にあまをたがう。

いすま。と。術計あり。その間小焼。終る。火煽の腕に。この時歴にあまをたがう。

不及んとま。この時歴にあまをたがう。





念之友子原危
 念之託先紀親急
念之 友子 原危 念之 託先 紀親 急

梅竹
 筆

たゞう。今いそぎ火も近づき。免しんとするに祈り。愍妻を投んたり。
此身の中も小怪ある。いよくこの身の罪深う。必捐あきておし。由
をやく。火を適是のえり。祈禱この身は罪業深く。かゝる憂同ふあふとも。
前の世の宿業ありと。いよく今ききう。詮方なり。頼むあを去り。えさるま
此身等も知らば。いよく父母とも。に年老て。幼るけ。まこと妻をのこせ。あ
愍ことと。いふあり。愍ことあり。あて死に。あらう。誰を便りて。世に後らん。頼く。い
此身ら。父母妻に代つ。まて父母の。り。末て頼む。こと。あらう。まて。あまの。こと。死期
頼ひ。あり。と。この時。小及び。ても。頼父母を。慕ふ。る。切なる。心。小。柏や。父母。の。
涙。を。う。く。と。流。し。や。その。子の。こ。心。易。う。ま。し。う。ま。し。く。今。の。あ。ら。ん。や。い。よ。く。首
ぎ。を。ま。わ。ら。う。す。べ。と。回。答。小。娘。の。飲。び。て。頼。に。挿。る。爵。給。の。格。し。と。籍。と。を
子。自。拔。し。り。柏。屋。の。妻。小。こ。う。て。い。よ。う。遠。の。来。来。頼。に。挿。て。大。切。に。持

一の。こゝと母にまへらま。こゝが紀念とくく人の出る時ふあふが一遍の田
 向をしてのりま。こゝを傳えとのりうちあめ。を極火近づき。渾身由熱
 きちどあまが柏屋主婦の不便さ不程さるに忍びざるを始の頼と道ま
 又甲斐あるたの身に拘むるひ道あつが梅との返るび。去来頼くとのり
 らどに主婦の痕残をけけま。さて如何とも詮方なけま。涙あふふ
 立退つ。こゝが家の火の近づきぬ及むぬまでも若替の衣敷をくく懐の
 ぬ潤度を由。一ツ二ツとり出さんと肉へのまども八方へ吹ちる烟に咽哽せ。
 眼ふりて働き得む。を覆つ。松口へ火さへ燃つたけけま。をば是
 までと僅なるりの秩最とを背負つ。その所をのりま出頼て大工の方に
 あり。こゝのれとあんのこゝが方より。震極きあやあまの少く。放小恙あふまの
 まづ歎びて俤のよう。と委しく語り櫛篋を出して母にまま。母の狂

きのどくおあり。かの焼土へ地つき。入るに娘の焦げ蕪つして在し。安に
 似ゆつづびて苦しき不面のこと。土不衝入してつりしと見え。そのとに燔残つ。鮮
 あまはつら女児と。知りてつらゆく哀しき。何ふ諭へんやうゆりゆく。因し
 ふと悲しとこと。人々に練めらま。死骸を野を送りせしとるん
 舞してのちく天道へ善に福ひし。悪不禍ひま。と然るにその女子哭
 死に遭ひて。生わらざるその身を燔る。かゝるた急の時節に及び。
 程父母のうへを忘まごど。親友に死して死を潔くは。かゝる志操あり
 とゆども。非命に死するを免るま。比。佛家に所謂者業とく。
 ままのこのとりのあやあらん

○昇後の老夫天変を知りし條

あり二三千石を領する家あり。その一番ある老丈ありて。年来老

實に仕へける。元来昇級して文學もあらば。尋常の豊かき。
 十月二日の落着にあり。門外不出て四方を瞻望。とらまらに肉火
 その同僚小示してゆくと。今宵かあらば。地震あつて。その勅揺え
 げーかろん家に飛ぶが怪象あるべし。急て用心をなさして。若びを用
 んとの他さるべし。才一に食物ありとて。暴にありの米を炊き。勝
 手に入してあるを焚く。同僚の少て。米を炊き焚くあり。
 頼て老丈の莊園を弛まらりて人に。そのよと告げらるに。ことを信
 する者もある。まご彼老丈何を知らん。そと天変地妖の下なき賢人
 君子も知る。と難し。况やかの老丈を也。必しに狐狸に變詐さして。
 かる。蟻語をいふのあらん。と多く嘲り。老丈の飯を焚く。
 且。老丈を少さく。櫃に入し。味噌香の物など。取添へ裏の方なる馬

傷へ持ゆき。楚を發て空知に居たり。同僚ゆまこあへ来て。居るの
 總て二に個さるぐの難終ふ。名成割ゆさぎ実割ゆ近づく。志は
 どのさせることなり。この夜天を暖みて。寒冷にあらざれとも。時あは
 十月の初るまじ久きくあふ居るに憶ひ先主に編さるこし心地して。
 我部屋に帰るもあり。まよひ大ふあまを伝ふて。いまご夜半ふあよ
 むぬを心緩く帰るところ。と猶あふ居るもあり。兎角まる間ふ夜也
 りの折はまも実割なり。この時天を勝臆とて。半天ふ雲霞復ひ星の
 光も近くつる西。老主の於四方を視やり。物ゆえのまむ獨長政かふる
 う旋風の暴に落まらぬ音して。大枕忽枕鳴動り。曰香の草木
 波のよく。屋舎の崩る者耳を貫く。老主の徳らとせと楚の上ふ聡と空
 して儚き居たり。整時ありて動揺静まり。老主を始め田居しめども。

徐くとも出でて。莊内を見巡るに或ひの姦の清まらざり。方あり或ひの初落
梁をよみて。こまに壓ま死するもあり。まさこ子良と權うまで。死由やん
盡くあり。子ひ親を索ね親の子を奪ひて泣叫ぶ。そのさよ更子自の
あてらまは。奥のつみと行てるに。是ま大崩ま換はて。往べき
方へかえも。ゆまは火焼ぬ。おの覆ひかりて。脱に火の燃んとま
あぞ。老史の同僚にかくと告て。水を汲まて。まづその恙
まを消す。かくて後ら姦のまんとて。つて老史を巨し。汝何と
てあまを。実小汝あり。せがらの姦。忍地焼土とま。えを。火を焚め
莊内を。見。こまに。功績ま。と。救多の。優美を。揚り。け。ま。充
史のまを。謝して。り。や。下僕界。依。え。ま。あ。で。り。で。る。天。地。の。ま。を
知るべき。但し。その身。不幸にして。若年より。今に。至り。かる。地。震。に。こ。ま

二六八 一冊

及



月夜
 月夜

上
 上
 三

質朴の老夫
天変でか
主家此火
災をす
ふ



天変

災

あひぬ下僕ハ元祿後の五之條の生まきまで去ぬる文政十一年二十からりふ
なりけるが大地震ありて。家法ま。死するの救を知らば下僕僥倖
にその難ハ免るまはとけまはと。失火に遭て。家放農具燬るまは。焼失ひ後方
まて迷ひ出隣國ある伝説へまは。こふ月日を送る程に弘化元年二月に
まは。おのまは大地震あり。折一由善光寺如来の困忙いと難りてまはより
まは。親族の人難くこふ集會するの及に。即死怪殺人多うりこふ人の皆知
る所まは。その節由僥倖に。恙まは。てまは。より後。即入素り年久しく。此
恩を蒙りうりひたり。然るに最初之條まは。大地震にあひ。こまは。情激る人
のまは。まは。あひ。大地震のあま。と。死ハ。失火。揺揺とて空近く。早の光り
に倍まは。まは。溫暖するのまは。と。つて。まは。て。今に。忘まは。ば。毎夜空をうらまは。るまは。あま
半のまは。まは。まは。心を安ん下てひひが。伝及大地震ハ二月まは。て。彼まは。別まは。るまは。まは。

強きよ。この以てして温暖なるを。常にいさむると存せし。その前夜より星
 の光。珠より大きくて。昇参の中の小星。依し糖星と増ふるもの。鮮明に
 なるのころ。著る舞ひ。特候ぎ。立離し。夜を和す。とあり。於て。是れ地震の
 兆と。親しき人。小のこまを告。竊に推はる。けり。果して。その翌。晩。突。地震
 の。み。け。こと。推はせ。ま。怪我。も。さ。され。と。ま。此。如。少。ても。家。破。り。く
 失ひぬ。ま。と。詮。方。あり。て。江。都。へ。出。ぬ。よ。小。老。若。救。を。き。して。死。し。る。中。に
 恙。る。死。へ。全。く。その。前。兆。を。い。ふ。た。る。故。こ。と。是。より。後。の。い。ふ。く。伝。ど。て。空。を。候
 ぐ。ざる。夜。と。ても。あ。ら。び。然。る。に。一。兩。日。ま。た。地震。の。兆。ある。故。を。要。す。存。い。な。せ。よ
 といふ。若。し。が。昇。族。の。若。の。い。ま。と。悔。り。の。い。ま。一。人。の。多。く。過。り。ひ。け。り。ま。ま。こ
 妻。を。信。せ。し。人。の。ま。あ。恙。る。く。在。す。と。下。僕。が。勸。ひ。の。事。と。い。ひ。て。り。び。る。と。人。の
 心。野。ま。よ。功。の。老。あ。り。と。い。ふ。妻。に。こ。し。ら。の。い。ふ。と。い。ふ。と。夫。小。歎。息。せ。り。存。と。い。ふ

接するにその便がと。實に後來の心約とすべし。和漢之才國舎枕卷
 の條にいそく。地中に竅あつて轉の巢のどく。水滲り陽氣を以て突
 入。その陰陽相和して宜きと爲るに幸なり。陽氣波洋して出ることを
 得。歳月を積む。地脹は水滲まる。故に井の水涸て時氣暖之變り
 寒解と交る時火氣透まればその寒解脹る。是をその理に志通し。是を
 震するとする時に蒼天昇くる。是の天さ常に倍して四方之地升る
 天の降にあらず。雨らんとする時に山の志通きがどく。既に伏陽發出す。是
 こそが爲に地震動はる。是にて始れ震る時志猛烈なり。是と云ふも。その
 次の後柔之。その後微動なりあるは伏火のしきと云ふ。是をさぐる由て乃至半
 年一季也。その後殘あるもの之。但大地震の時海の汀遊泥涌騰する。是
 き浪山のどくに訴る。世よと云ふと夏余美と云ふ。是を脹る所の地暴に

え沈むをぞとせりて洋中の波靜にそとるにかきつらば夏奈美の海

岸のこゝろかゆ風が星をてりて夜あかえをさかするにその鏡はよく合つ

消ていつの時にも果後の病が云て悔し。散て用心せざる人多く喪亡

しうとの一文不知の老妻なりとも考る所ありて言出さるを經べ

うづび宇治捨遣物籍にのぞく唐土に一人の老媪あり。朝とく起て後

ある岳にゆりて降る。暑き晴雨に拘らる。身中の務とすすうとどし。

人々の心を知らずして多う。さきを疑ひたり。かくて一時弱官等老媪に

王と問けるに老媪答へてその山上に年奮る古墳あり。傳へてのよみ

古墳に若血の著とあるが。その邑忽死落海とある。と亡父のゆを

たり。困ておのまき若き節より。朝頼起てまづ是と云るに一紙を拾め各

等をも。あるふあらせると云ふ。と少て弱官等へ大に笑ひのりてさるる

あるべきぞと斬りし隙に各密結ひあらま。彼古墳に血を著して老

媪を殺す所もまじ。あまき一具あらんとて小物の死にうらを漆ね

腹を引裂きて。かの古墳に塗つけおたう。老媪の初ともあらま

切の初岳に登り古墳せりしに豈針らぬ。段血の著てあらんとす。あま

於て天小孩き。山上より持がうやく。近下りては息吹き。今日この邑

に大變あり。疾く細文を片舟にて一割由早く山に登る。然あらくも

命危ふらんと。いかにしてまゝなり出邑の内を弛まらう。その工を著

ふける。この老媪が殺あては老人の何をらりと疑ひ。あまりども

あくべきにあらま。戸に資財雜具を緘げ。宛然急火の出来し

て。周章して山に逃せし。邑の内ふても心こめて。速打する。老の

夢て。日来より律儀なる。老媪が云放あらんと。是れに隨ふ。老のあれど。

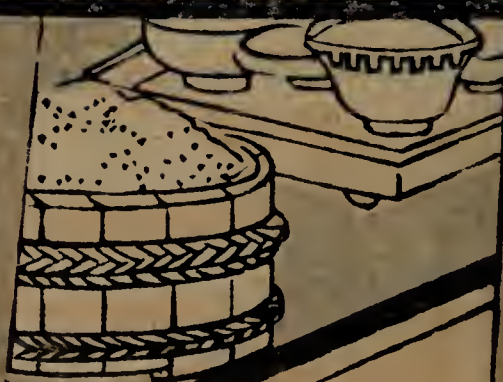
多く先老の纏結と侮りて勅うぬあり。殊に彼弱官等ハ先擧
程ひ喋ぐせりて。俟とそとて指さし笑ふ。かくてその日未刻なるころ。
暴に大北震動して。残るなく海に没し。僅ふその岳を遺せる。こ
み於て山とへ逃登りたる者の外ハ。こま悉く死ふけり。とぞ。これ
古墳へ殷血を著し。弱官の所為あれど。その時みてそのことある
こと既に天変の兆るるめ。正史正婦の言とどど。時とて驗あり。
その男きせりて侮る。道志らぬ人といえん。

○士人自此飢民を救ふ條

或人の物結に一人の武士あり。元未落祿ありて貧し。この頃。常は慈
悲の志あり。然るにこの夜大震して。その家半傾きけり。とど。朋友に
あつねむ。まづ安堵の心ををま。近隣ハよにむさび。親しき人の安



士人飢民と
憐れむとて
頭小握り
飯を絶せ



二月

長

香を舐ひ。口が赤へ傳り来り。い。名も明るに程近し。于時その妻に示
 し。そのやう。今宵所くと地廻り。い。夫々。家内。火災に罹り。縁後
 まるの。幾千人。といふを知らず。その中。あ。いと哀まふ。見え。受。る。者。あり。
 今より飯を焚ひ。持出て。施さん。と。米。の。炊。け。ど。釜。小。さ。う。て。い。ふ。が。ま。り。あ。
 る。ね。ど。是。と。握。り。飯。と。り。い。ふ。あ。て。持。出。ん。と。家。内。で。入。る。火。器。あ。り。
 以。未。て。炊。く。桶。を。よ。け。ま。し。と。繩。り。て。縛。し。その。端。を。背。に。う。け。て。その。中。へ。
 握。り。飯。を。登。て。持。出。つ。或。ひ。入。道。路。に。持。び。倒。ま。て。詮。方。な。げ。ふ。え。る。者。
 等。に。か。の。飯。を。よ。け。ま。し。と。流。し。て。合。と。結。ぶ。と。限。り。ま。し。か。の。武。
 士。も。結。共。に。隨。走。の。流。を。流。あ。ら。ま。く。に。あ。る。か。ら。健。を。り。の。握。り。飯。今。
 の。残。り。ま。り。か。り。に。う。り。程。道。路。に。呻。吟。の。幾。百。と。い。ふ。限。り。も。あ。り。は。何。
 と。ぞ。渠。等。に。も。供。ん。と。あ。り。ん。ど。物。の。あ。ら。さ。ま。づ。力。足。ら。ざ。る。と。獨。身。で。立。

戻らんとせし所に井の行燈出して版を齧く勢のありけしむ。こまき

ひとまよりてその版握り版にま。有る隙りて棄てしより亭下とて棄てし

漢子より出吾儕活業にひひど今日ひの強ぎゆて親族の方へ移ら

んと禁する版中てひび棄る工のなり難し。と漸くのみに武士の大不怒

りて棄るぬりのありなごて行燈をひひおんる吾を窮士と侮りて

お此のふあや心得ごとく一旦武士が笑ひつるを愛でぬあるべき。と白服

つめてひひけしむ。亭下とて是に懼まをほし看板とせし。ハ家徒然と

得遠ひ今日の高ひを。侍らひ曲て舞さく之と倍終ど武士の程々

入まひ。今より後ハ何ふ由せよ。我ハ看板をみて棄りて。そので空く

出まるべき。右左のまむに頼り。棄てしと理せりて切に責らまて。亭下と

額を柱まむ。さるる棄てしゆ棄てしゆ棄てしゆ。その飲桶に入る。その版を

三よそ人形てふゆりて迷惑あり。半はて絆一のふとゆいどの由可びこよあ
 賣まきと搦に腰せうち搦て。初くべき絆由あふび亭主の半ほど君が
 家族幾個在まろ存せむと。この半はて一飯の縛は是りゆべきと。法てわ此
 如此宣ふと。吾們違つて行燈を出しゆいと答ふて。責むこのふの両刃で
 半のふに似合しうらび。曲てこの長ハ絆きむと。ゆいに武士急改て。吾
 家族に合ふものあり。奏トとのふをまどて責人我如此とゆて搦飯を
 持出ゆりしが器小さく。ゆふがまに施しゆび。遺憾にゆふその折うらあ
 に行燈のあるせりて。近入まばその飯あり。今求めて飢人にふつんとゆふ
 むりんとゆつて亭主のゆらち笑ひ。その飯とて由二升餘り限り由あふぬ
 飢人を十分が一由救ひ雅けん。始め施一のふあては志の達しゆり。このゆ
 果ぬに武士がゆふゆ我分際にて。幾個の人を救ひん。汝が言を俟び

して我由よくそをさし知まら。然もよもいふ懐に世をろりの黄金と我を
ばその限りの救んと元来いふ情然ら。汝もまげて我不よさぶ陸徳の
爲しとあろ人。去来頼くと首にかけら。炊桶をさうつこま亭主の
ふのと死忽地不形と改めて武士と作ぎ祝て額著ら。さて由賢き四心
ろふ。世に善老のありといへども悪が如き人稀なるべし。その志しを承へ
まじ。河条香むとあろ人。僕を索めむこの飯を君にまろし。けしども。
初て不君まろ肯ひのら。固て白米の料を受脚あろ。薪の代り君に
力と食さんのか。まじい免一の又といふ。武士はて大小款び別件の飯を
極り。持出てそを知る人不能して降りしとぞ。

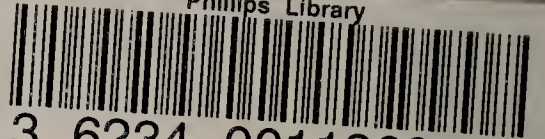
接るにこの武士。かる凶暴の時にあひて。家の破壊を願ふまで元
より事足る身にもあろぬを。資財を捐て飢民を救ふ。実小善

老とのりとも可なり。世に金銀を貯るの由。その志あるは稀なり。
 通些細の金銀を捐て。人を恤むとあり。その姓名を彰りて。徳
 を衒ふの心あり。先年米穀飢饉とて。賑民衒に縦横するに
 或富家夜毎に粥を焚き。擔桶に納て煮つせり。或は橋上
 街頭に在る。貧人を乞食に共へしと教て。その名を歎いさん。前
 後五十餘日。同一夜由とを闕となく。とて。ことごとく。或は
 ろうん五雜俎にいそぐ。云く。貨物を竭して。権貴に媚まこと肯く
 些微を捐て。貧乏を濟しむ。こと天下の通惑なり。と和漢古今
 常人の情毫末も差ひあり。是に及して。怨寡なく。他人の為に計
 るもの。とて。千に一二のこと

安政見聞録卷之上 終



Phillips Library



3 6234 00118695 9

